
ストーリー

関東平野の中央部に位置する行田市は、日本一の足袋生産地として知られ、足袋産業全盛期を偲ばせる足袋の倉庫「足袋蔵」が今も数多く残る“足袋蔵のまち”です。表通りに土蔵造りの見世蔵が建ち並ぶ“蔵のまち”は各地にあります。行田はそうした“蔵のまち”とは異なり、足袋蔵のほとんどが裏通りに建てられています。蔵の造りも土蔵造りだけでなく、石造、煉瓦造、モルタル造、鉄筋コンクリート造、木造と多彩です。いつどのようにして「足袋蔵の町並み」が形成されたのでしょうか。

1.足袋づくりの始まり

利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。行田足袋については、「貞享年間亀屋某なる者専門に営業を創めたのに起こり」との伝承があり、享保年間

(1716~1735)頃の「行田町絵図」に3軒の足袋屋が記されていることから、

18世紀前半には生産が始まっていたと思われます。享保年間に忍藩主が藩士の婦女子に足袋づくりを奨励したとの伝説があるように、その後足袋づくりは盛ん



になり、明和2年(1765)の「東海木曾両道中懐宝図鑑」に「忍のさし足袋名産なり」と記されるまでに、広く知られるようになりました。足袋には株仲間がなく、取引が比



較的自由に行えたことから、足袋づくりは益々盛んになり、天保年間(1830~1844)頃には27軒もの足袋屋が、行田のまちに軒を連ねるようになりました。

江戸時代の足袋

行田足袋の始まりは約300年前。武士の妻たちの内職であった。

近世になると行田市周辺地域では藍染の「綿布生産」が盛んになり、これを原料に行田のまちで「縫製技術」を生かして「足袋づくり」が始まった。

■行田の足袋蔵は、遅くとも江戸時代後期頃には建てられ始めていたようで、弘化3年(1846)の大火の際に足袋蔵が延焼を食い止めています。足袋蔵は商品や原料を扱いやすいよう壁面に多くの柱を建てて中央の柱を少なくし、床を高くして床下の通気性を高めるなど、内部の造りに特徴があります。



江戸時代の足袋に関する記録が残されているのが「秋山家」と「橋本家」。

「秋山家」は享保17年(1732)創業と伝えられる行田有数の老舗:屋号は高砂屋(当主は代々金衛門を襲名)。創業時は質屋、酒屋などを営み、その後「足袋屋」を営ん

だようである。「橋本家」は足袋屋のほかに木綿問屋などを営んでいた行田最大の商人であり、屋号は荒物屋(当主は代々喜助を襲名)であった。個人による製造・営業から抜け出して生産・販売を担う「足袋屋-下請け-内職」といった原型がすでに19世紀から見られる。

江戸時代の足袋蔵エピソード①

江戸時代の行田町は幾度かの大火に見舞われましたが、その中でも弘化3年(1846)の大火は記録的なものでした。この大火の火を止めたのが「大澤久右衛門」家の蔵造りの建物です。そしてこれを契機に「今津印刷所」「古蛙宴」



など防火に有効な蔵造りの建物が多くたてられるようになりまし。住宅部分については風が吹き付ける側だけを塗り壁としています。行田は冬に北西方向に風が吹く

ことから住宅部分については風が吹き付ける側だけを塗り壁としています。こうした「半蔵づくり」

の建物が行田の蔵づくりの大きな特徴です。江戸から明治にかけて、土蔵は外壁を漆喰などで仕上げ、壁も厚くし火災や盗難などに備え、かつ外観に装飾などを施すものもあり、象徴としても盛んに造られたようです。また、この大火は天万稲荷神社より南側へ



は燃え広がらなかつたため、お稲荷様が日除けをしてくれたのだという言い伝えから、各家の敷地奥に屋敷稲荷が祀られる風習があり、現在でも祀られる家が多く存在しています。さらに、“丙午は火にたたる”という言い伝えから、この日は一切火を使ってはならないというお触れが出ました。この防火デーの風習は長く続きました。当時の足袋づくりは大火事によって革足袋から綿足袋に移ってきたとはいえ、まだ商品として生まれていない状況であった。行田足袋を忍藩主の奨励(内職)と考えられます。

江戸時代の足袋蔵エピソード②

足袋づくりの始まり。北埼玉地方では、江戸時代後期の1780年代頃に藍染めが始まったとされます。利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。

行田市の足袋づくりには、利根川と荒川という2つの大きな川に挟まれた地形が関係しています。この2大河の間には、小さな川や水路が流れていて水がたくさんあることから、川の氾濫によって砂質土がつもり、夏は高温に



てるのにぴったりでした。綿縫の技術が培われ、足袋づく

なる。そんな特徴を持つこの周辺は、綿や藍を育布の産地となった近世の行田市では、しだいに裁りが始まりました。藍の香りが虫除けにもなること

ことから、農民の多くが野良着(農作業用の服)として重宝したようです。高崎家の芭蕉句牌(たかはしけのぼしょうくひ)。明治9年に当時の正覚寺に建てられています。碑表には右に「名月の花

かと見えて綿ばたけ はせを」と句が刻まれ、中央には孝協大徳を称える碑文が記されています。

江戸時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/008.pdf>

江戸棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/102.pdf>

① 江戸時代の足袋蔵

=====

2.足袋産業(明治)の発展と足袋蔵の建設

近代に入ると足袋は大衆化して需要が拡大し、行田の足袋商人は東北地方や北海道に直接赴いてさらに販路を広げると共に、軍需用の足袋の生産にも携わり、他の産地を圧倒してゆきます。足袋づくりに は作業工程ごとに専用の特殊マシンが導入され、日露戦争の好景気を契機に 足袋工場建設ブームが起こって、敷地の裏庭に工場が建てられてゆきます。生産量が増えると、出荷が本格化する秋口まで製品を保管して置く倉庫として足袋蔵が必要になり、既存の土蔵の転用と共に、敷地の一番奥に足袋蔵が 数多く建てられるようになりました。石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田は、近世前半に城と 城下町の整備が行われ、間口の広さに応じて各家に税が課せられたので、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されていました。近世の行田は、鴻巣・吹上から館林へと続く館林道・日光脇往還の宿場でもあったので、馬の世話を行なう裏庭とそこに通じる路地が家々の間に設けられていましたが、近代になって馬の世話の必要がなくなり、遊休化した裏庭に足袋工場と足袋蔵が建てられていったのです。こうして短冊形の敷地に、北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりと言った防火・防寒対策を施した店舗・住宅、接客用の中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稻荷が表から列状に並ぶ、足袋商店特有の建物配置が形作られました。

-----明治時代の足袋-----

城下町から足袋のまちへ

足袋屋は、江戸時代末の天保年間には 27 軒を数え、行田町で一番店数の多い商売になっていましたが、明治維新後、廃藩置県が行われると、武士から足袋商人に転身する者が多く現われ、その数はますます増えてゆきました。東北地方に鉄道が伸び、北海道の開拓が始まると、行田が足袋の産地として最も北にあったことあって、多くの足袋屋が販路を東北・北海道に広げて成功を収めました。「呉服商山田清兵衛商店」の明治 16 年(1883)の店蔵「十万石ふくさや行田本店店舗」。



また、西南戦争で軍事用の足袋（鷹匠足袋）を受注し軍需品受注の足掛かりを掴みました。明治



20年代には足袋づくりにミシンが導入させ始め、工場での足袋生産が行われるようになるなど、機械化・近代化が始まり、生産量は飛躍的に増加してゆきました。明治23年頃までは足袋生産は“家内工業”、そして、ミシンの導入により

一層発展しました。

※手工業期(明和年代から明治20年頃まで) 明治の足袋は明治になって下級武士の妻女が生活の糧に貸仕事をしたとされています。

明治時代の足袋蔵エピソード①

明治19年には橋本喜助商店が、現在の行田郵便局の場所に行田で初めての足袋工場を設立し、明治23年ごろからミシンを導入するなど、足袋づくりの近代化が始まりました。橋本喜助は明治19年(1886)に酒蔵を買収し、内部を改造して原料の整理から製造、製品検査、荷造りまでできる

「橋本足袋工場」
機械が導入され、
なりました。さら



を設立した。そして、明治23年頃になると足袋の裁縫に
小さいながら工場生産様式をとると生産高も増えるように
に明治25年頃にドイツの「八方ミシン」が導入されると

行田の足袋産業が急激に発展しました。古い手工業時代から、新しい家内工業への幕上げです。

明治時代の足袋蔵エピソード②

それと並行して足袋商人たちは、共同で資金を出し合って郵便小包、電信、電報、馬車鉄道、電話、電気など、他に先んじてまちのインフラの整備を進めました。明治32年(1889)明治7年に武士から足袋商人に転身した牧野鉄弥太氏は明治32年以降3棟の“足袋蔵”を建設するなど「牧野本店」



は商売を拡大して行きました。そして、行田の足袋産業は、日清戦争による海軍からの艦上足袋、日露戦争による陸軍からわらじ掛け足袋を大量受注するなど、軍需品受注をバネに大きく生産を伸ばしていきました。

明治時代の足袋蔵エピソード③

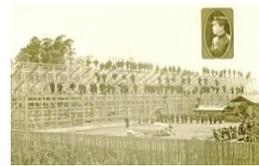
明治37年～38年(1904-1905)の日露戦争の好景気で軍事用足袋を大量受注したことを契機に、足袋工場建設ブームが到来。この時代は軍事用足袋を大量受注したことを契機に、足袋工場建設ブームが起こり店や住宅の裏の馬の世話をしていた空き地に工場が次々に建てられました。それと共に足袋を保管しておく足袋蔵も多く建てられるようになりました。

明治39年(1906)日露戦争後の不景気

仕事が欲しがっていた職人に造らせた栗原代八商店の足袋蔵「栗代蔵」。この蔵を建設した栗原代

八商店は文化5年(1808)創業の老舗足袋商店で、江戸時代は「松沢屋」と呼ばれていました。「小町足袋」「旗印足袋」の商標で手広く商売を営み、すぐ近くに工場があり、敷地内にも数棟の足袋蔵が立ち並んでいました。

明治42年(1909)には電話が開通。明治43年にはミシンの電動化により生産の飛躍的に伸びていきました。生産額が増えると、製品(出荷が本格化する秋まで)をしまっておく倉庫“足袋蔵”が必要になり既存の土蔵の転用とともに、明治32年ごろから足袋蔵が敷地内に数多く建てられるようになりました、こうして短棚形の敷地に表から店舗・住宅、中庭、工場、足袋蔵、敷地稻荷が列状に並ぶ行田の足袋商店の典型的建築配置が形成されました。保泉商店は足袋原料商として明治35年に創業し、明治42年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を買い取ってこの場所に移転しました。「保泉蔵」はその典型例です。



並ぶ行田の足袋商店の典型的建築配置が形成されました。保泉商店は足袋原料商として明治35年に創業し、明治42年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を

その一方で、明治42年には「橋本喜助商店」が郊外に行田最初のノコギリ屋根の大規模工場を建設し、足袋工場の大規模化と、郊外進出が始まります。さらに、明治43年には「草生蔵」は石蔵も存在しています。足袋蔵の建設が本格化する明治30年代頃までは、純和風の土蔵が建てられていましたが、明治時代末頃からは土蔵の小屋組みに洋風建築技術が導入され、土蔵だけ洋風建築技術が導入された大型の土蔵でなく石蔵も建てられるようになりました。



明治45年には「行田足袋研究会」が発足し、若手が中心に電動ミシンの導入推進、縫製工程の改善、足袋の宣伝等の活動を行っている。

以上、明治時代の足袋

明治時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/009.pdf>

明治棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/103.pdf>

工場棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/104.pdf>

②明治時代の足袋蔵

=====

3.足袋産業(大正)の発展と足袋蔵の建設

大正時代の足袋産業は、企業統合による大企業化、大工場化には進まず、のれん分けして独立していく、小規模分業経営の道を歩きました。織布業、染色業、ネル張業、底張業、印刷業、箱屋、糸商、ミシン屋、増地業など足袋関連産業が派生してまち全体が「足袋づくり一色」に染まっていきました。大正初年から工場制工業の発展期となり、足袋生産は行程ごとに特化したミシンが導入されね足袋製造の分業化が一気に進み、生産量を増加させることになりました。コハゼ付きミシン、足踏み式裁断機などの機械化により、作業効率が飛躍的に拡大しました。生産量は大正元年に 1,000 万足を突破し、同 6 年には 3,272 万足になっている。その後、第一次

世界大戦
関東大震
行田に集
年には
に飛躍しま



37 大正3年の足袋工場(大澤商店)

後の不景気で生産量は一時期低迷したが、12年の災により京浜地方の足袋産業が壊滅したため、発注が中し、同 14 4,312 万足した。その後



行田足袋製造も進化を遂げ、大正末期から昭和初期には全盛期を迎えるに至っている。

反面、大正 15 年(1926)結成の労働組合の労働論争、昭和初期の恐慌と相まって足袋産業は混沌とした時代に向かっていきました。



41 絵葉書 行田新町通り

-----大正時代の足袋-----

大正時代の足袋蔵エピソード①時代による変遷が理解できる。短冊型の店蔵、主屋、足袋蔵

保泉商店は足袋原料商として明治 35 年に創業し、明治 42 年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を買い取ってこの場所に移転しました。その後足袋産業の発展と共に商売を拡大し、大正 5 年には大型の土蔵を建設しました。さらに第一世界大戦後の不況を乗り切って行田一の足袋原料商に飛躍。昭和元年には大谷石の店蔵(L 字形の店舗併用住宅)を建設しています。

番奥の石蔵が、次いで東側にモルタル蔵(新蔵)が建設され、



その後も昭和 7 年に一西側の蔵の間が塗り壁

で繋がれて、この蔵並びが完成しました。

大正時代の足袋蔵エピソード②第一次世界大戦中の行田の足袋産業。

大正3年(1914)～大正7年(1918)第一次世界大戦で、大戦後の不況で一時的に足袋産業は停滞しました。当時の建物に行田最古の大規模足袋工場「イサミスクール工場」があります。明治43年に行田電燈株式会社が電気の供給を始めると足袋づくりに電動マシンが導入され、足袋の生産量は飛躍的に拡大して行きます。この頃に前後して、ノコギリ屋根をもつ大規模足袋工場が建てられ始め、行田の足袋産業は近代産業へと発展して行きました。この工場は「鈴木勝次郎商店」が開設した既存する行田で最も古い大規模足袋工場(現在は被服工場)です。中央のノコギリ屋根の木造洋風工場は大正6年、入口右側の旧事務所は大正7年にそ



れぞれ建設されています。さらに、大正初期には「大澤商店」の足袋工場、「足袋蔵ギャラリー"門"」、「時田蔵」などの"足袋蔵"が建てられました。大正10年(1921)には行田駅開設しています。

大正時代の足袋蔵エピソード③大正12年(1923)関東大震災、東京の足袋産業衰退。

関東大震災による東京足袋が衰退すると、反対に行田の足袋産業は一挙に飛躍し日本一の生産量を誇る町になりました。それを機に行田の足袋は東京市場を制覇し、足袋の生産量日本一に飛躍しました。大正11年(1922)「橋本喜助商店」橋本商店は足袋の商標に「ライオン」を用いて活躍しました。



「牧野本店」の豪勢な店舗と足袋蔵工場、レンガ造りの「大澤蔵」など足袋産業全盛期の栄華を象徴するような店舗や足袋蔵がこれられています。「旧忍町信用金庫」と「長井写真館」は大正期の木造



時期に数多く建設された洋館(モダンデザイン)



です。足袋蔵は大型のもが建てられるようになり、大正時代末には鉄骨煉瓦造の足袋蔵が現われました。

大正時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/010.pdf>

江戸棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/102.pdf>

③大正時代の足袋蔵

=====

4.足袋産業(昭和)の発展と足袋蔵の建設

進化を遂げた行田の足袋工場制製造(工業の発展期)。昭和初期には全盛期を迎えるに至っている。

昭和2年(1927)に始まった金融恐慌は、行田の足袋産業にも深刻な影響をもたらし、この危機に、大阪・堺の「福助株式会社」が始めた工場制分業生産システムを導入して生産費を減少させ新製品を全国へ売り込みました。昭和9年「福助株式会社」忍町に出張所を設置しています。こうして現在にまで続く分業生産体制を確立した行田の足袋産業は、戦時下、昭和12年(1937)の日中戦争を契機に陸軍が行田の工場を管理・監督するようになり、翌年から防寒帽の縫製が命じられました。一方、足袋製造・販売自体も昭和12年以降戦時統制化に追い込まれ、休業する工場が続出しました。しかしながら不況下の過当競争を勝ち抜き、昭和13年(1938)には年間8500万足、全国シェア約80%を生産する“日本一の足袋のまち”になりました。昭和17年(1942)には184の足袋業者は24の有限会社と1個人商店に企業統合され、行田足袋産業は軍需生産一色に染まってゆきました。



そしてその背景には、生産量が増加しても企業統合等による大企業化には進まず、逆にのれん分けして次第に足袋商店と足袋蔵が増加、ピーク時には200社以上の中・小規模の足袋商店が共存して一大産地を形成していた、行田の足袋産業ならではの特色があったのです。

-----昭和戦前の足袋-----

昭和戦前の足袋蔵エピソード①昭和初期のノギリ屋根の木造洋風工場

鈴木勝次郎商店は明治40年に創業し、大正6年にはノギリ屋根の大規模足袋工場(現在のスクール工場)を建設して、電動ミシンによる大量生産を始めました。その後、組み立て工場であったこの工場を買い取って生産を拡大、歌舞伎の“勇み肌”から名をとった「イサミ足袋」の商標で行田有数の足袋メーカーへと成長していきました。この工場は、現存する行田最大級のノギリ屋根の木造洋風工場で昭和初期の建設と伝えられています。昭和3年足袋商店の大規模な工場が多数進出してきました。そうした住居地から完全に独立した大規模足袋工場のさきがけとなった工場です。個人商店から企業へと発展して行った昭和初期の足袋産業を象徴する近代化遺産です。



昭和戦前の足袋蔵エピソード②昭和13年、日本一の足袋のまち

東北・北海道に販路を伸ばした行田の足袋商店は、「力弥足袋商店」なら八戸、

「道風足袋商店」なら尾去沢鉦山といったように、問屋を通さずに各々が地域単位で独占的な販売網を築き、協調しながら販路をやがて全国そして海外へと広げて行きました。この頃の行田の人々は、老若男女を問わず皆が寝食を惜しんで工場や家庭で足袋づくりに励み、まち全体にミシンの音が響き渡っていました。昭和13年(1938)には“日本一の足袋のまち”になったのです。

昭和戦前期には鉄筋コンクリート造、モルタル造、木造の足袋蔵も現われ、大小様々な多種多様

の足袋蔵が建てられました。

■『奥貫蔵』大正～昭和初期の足袋蔵(土蔵) “足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”



「奥貫蔵」は奥貫忠吉商店が大正時代～昭和初期頃に建設した足袋蔵です。奥貫忠吉の長男賢一郎は明治 20 年東京日本橋の輸入織物問屋に奉公に行き努力で出世し、やがて貴省し足袋商人に転身した人物です。わずか数年で賢一郎氏は北海道から三陸海岸の広い地域で得意先を広めることに成功しました。自らの顧客の開拓により“問屋を通さずに足袋を直販する方式”です。さらに日露戦争、第一次世界大戦による戦争景気で財を成し、足袋工場を建設するとともに、その商品倉庫としてこの足袋蔵を建設したものです“足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”です。

昭和初期から 9 年までに建てられた足袋蔵。「奥貫蔵」「田代蔵」「鯨井家倉庫」「時田足袋蔵」「行田窯」。



■『忠次郎蔵』昭和 4 年(1929)の店蔵(土蔵)



足袋原料問屋小川忠次郎商店の店舗兼住宅として昭和 4 年頃に完成(大正 14 年に棟上げ)した、行田最後に建てられたと思われる店蔵です。小川忠次郎は明治 40 年に熊谷で魚商を始め、大正 9 年には行田で足袋原料問屋を開業しています。忠次郎蔵は平成 16 年に『NPO 法人ぎよだ足袋蔵ネットワーク』の事務所、及びそば店『忠次郎蔵』として活動しています。「翠玉堂」町屋、「小川源右衛門蔵」店蔵が建てられています。



■牛懐石『彩々亭』昭和元年・7 年・10 年の住宅兼事務所を改装したもの。

足袋屋の小僧から身をお越し、力と押しの世渡りで一代にして財を成し、参議院議員まで登りつめた荒井八郎



が昭和元年と 7 年さらに 10 年と 3 回に渡って建設した住宅兼事務所を、約 10 年前に改装した懐石料理亭です。かつては“足袋御殿”と呼ばれた贅をつくした建物の中で、美しい庭を眺めながらの懐石は絶品です。銀行建築の「武蔵野銀行」が建てられたのもこのころでした。そして『牧禎舎』昭和 15 年(1940)の事務所兼倉庫と工場の建設を経て、昭和 16 年(1941)太平洋戦争へ突入しました。



昭和戦前 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/011.pdf>

戦前棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/106.pdf>



5.足袋産業(戦後)の発展と足袋蔵の建設

足袋から被服産業へ。戦後昭和 20 年代に再び活況を呈した行田の足袋産業は昭和 25 年に経済統制が解除されると、行田の足袋産業は息を吹き返し、再び足袋蔵が建てられるようになりました。その当時は材木が入手困難なこともあって石蔵が多く建てられました。支柱を持たずに大谷石を積み上げて壁を造り、その上に屋根を乗せているのが特徴です。新興の足袋商店も多数生まれ“足袋蔵”も再び建設されるようになりました。また大正時代に足袋産業から派生した被服産業も台頭し、倉庫を建設しています。戦後の木材不足から、この時期の足袋蔵は部分が大谷石造の蔵になりました。

昭和 30 年代前半まで足袋蔵の建設まち”と違って多種多様であるのは、この建築様式を取り入れながら足袋蔵が建てられ続けたからなのです。



た。戦後は木材不足から石蔵が主流となり、は続けられました。行田の足袋蔵が他の“蔵のように 100 年以上もの永きに渡って、新しい

昭和 29 年ナイロン靴下が発明されると、服装の洋装化とあいまって、翌年から足袋の需要は急速に落ち込んでゆきました。行田の足袋業界は被服、靴下、ハップサンダル、地下足袋など各種繊維産業へと転換していきました。服装の洋装化の進行によって、その後も足袋の需要は減少を続けましたが、近年若い人の間で「和装ブーム」が起こるなど足袋を見直す動きも起こり始めています。行田の足袋産業は生産拠点を海外に移す企業も多くなりましたが、現在でも約 30 の足袋関連企業が存在し、年間 141 万足、全国シェアの約 35%を生産する日本一の足袋産地であることには変わりはありません。昭和 29 年にナイロン靴下の量産が始まると、服装の洋風化の進行と相まって、足袋の需要は大きく落ち込んでしまいます。それと共に行田の足袋産業は急速に衰退し、昭和 32 年を最後に足袋蔵は造られなくなりました。足袋蔵は商品倉庫としての役割も終えて遊休化して行きました。その一方で、『十万石行田本店店舗』のように建物のもつ歴史的風格を商業活動に生かした店舗も現れ、昭和 50 年代には、足袋蔵の再活用が議論されるようになりました。



昭和戦後の足袋蔵エピソード①戦後の行田の足袋産業復活、足袋蔵の再到来。

昭和 25 年行田の足袋産業は息を吹き返し、再び足袋蔵が建てられるようになりました。その当時は材木が入手困難なこともあって石蔵が多く建てられました。支柱を持たずに大谷石を積み上げて壁を造り、その上に屋根を乗せているのが特徴です。新興の足袋商店も多数生まれ、「孝子蔵」、「小沼家」の石蔵“足袋蔵”も再び建設されるようになりました

■『孝子蔵』昭和 26 年(1951)の足袋蔵(石蔵)



大木末吉商店が昭和 26 年に敷地の一番奥に棟上げた足袋蔵です。大木商店は「孝子足袋」で有名です。昭和 25 年に経済統制が解除されると、行田の足袋産業は息を吹き返し、再び足袋蔵が建てられるようになりました。その当時は材木が入手困難なこともあって、こうした石蔵が多く建てられました。支柱を持たずに大谷石を積み上げて壁を造り、その上に屋根を乗せているのが特徴です。2 階の窓も大谷石の引き戸になっています。大木商店は間口が狭く奥が長い短冊形の敷地に、店蔵兼住宅、足袋工場、足袋倉庫が一行に並んでいます。これはかつての、城下町の商人町(行田町)に位置する足袋商店の典型的な建物配置です。この石蔵は行田足袋産業の最後の輝きを伝える近代化遺産と言えるでしょう。また大正時代に足袋産業から派生した被服産業も台頭し、「舞原蔵」などの倉庫を建設しています。

戦後の木材不足から、この時期の足袋蔵は部分が大谷石造の蔵になりました。戦後は



木材不足から石蔵が主流となり、昭和 30 年代前半まで足袋蔵の建設は続けられました。



■行田のまちを彩る、モルタル蔵

行田の足袋蔵が他の“蔵のまち”と違って多種多様であるのは、このように 100 年以上もの永きに渡って、新しい建築様式を取り入れながら足袋蔵が建てられ続けたからなのです。「松坂屋蔵」倉庫(モルタル蔵)、「栗原家



モルタル蔵」も登場しています。

■ 足袋を売る。出来上がった足袋は、以前は袋に入れていたが、現在はビニール袋となっている。そして、行田の特徴ともいえる商標ペーパー

を添付した。行田の足袋製造業者は、それぞれ自社のブランドを持ち、それを商標として登録していた。工夫をこらしたデザインによる商標を印刷し、販売に際しては製品とともに袋に入れたり、縫いつけたりして、自社の看板にしていた。1 者が複数の商標を持つ場合があり、その数は行田全体で 200 を超えるといわれる。

戦後昭和 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/012.pdf>

戦後棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/107.pdf>

6.平成の足袋産業と足袋蔵の再生・再利用。

6-1 バブル経済期以降の行田の足袋産業

バブル経済期には安価な外国産の被服・繊維市場が席卷し、崩壊後には国内の繊維業界全体が急速に衰退しました。行田市内でもこの影響を受け商店街の空洞化が顕著になると、取り壊される足袋蔵が目立ちました。平成 19 年には行田足袋商工協同組合が解散しています。行田市内においても昭和 55 年から平成 9 年までは全国の 40%程度を占めていたが、平成 25 年には 23.1%に衰退している。事業所の数も昭和 55 年の 34 軒から平成 25 年には 5 軒となってしまいました。

6-2 足袋蔵の再生・再利用。

近年では足袋の保管倉庫である“足袋蔵の再生”や、“カラフル生地を用いた柄足袋の生産”など行田足袋を取り巻く環境に変化ができました。最盛期に比べれば生産量や業界の規模こそ大きく縮小したが、伝統技術は今でも市内の事業所や職人に脈々と受け継がれており、その足袋の歴史は行田の歴史を語るうえで欠かせないものとなっています。

一方、平成 16 年(2004)に行田商工会議所のバックアップを受けて『NPO 法人行田足袋蔵ネットワーク』が設立され、足袋蔵などの遊休化した近代遺産を歴史的な価値を生かしながら再生化しようと活動を始めました。具体的には、「蔵めぐりスタンプラリー（蔵めぐりまちあるき）」などのイベントを開催するとともに、「忠次郎蔵」、「足袋とくらしの博物館」、「牧禎舎」を相次いでオープンさせました。等を国登録有形文化財への登録を推進するなどの活動を行い動きと呼応するように「はす蔵」などか次々に開業して、足袋蔵再



さらに「高澤家」した。そうした生の機運が盛



平成 25 年度より行田市がファンドによる足袋蔵の保存・活用を始めようと「ふるさとづくり事業」を開始。同事業の補助を受け、平成 26 年「NPO 法人行田足袋蔵ネットワーク」が「牧亭舎」の未活用部分を“アーティスト・シェア工房”として再活用を始めました。同 NPO は平成 28 年度にも「牧野本店」を“女性の起業家支援のインキュベーション店舗施設”として活用しています。また、同年より「足袋のまち行田」活性化推進協議会が設立され、足袋の新製品の開発、海外等への販路拡大等の事業が推進され始めた。今後、こうした動きが加速して、まちの活性化に繋がることが期待されます。

そして、平成 29 年(2017)は行田市は「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」のストーリーが県内初の“日本遺産”に認定されました。

ストーリーの構成資産（文化財）は 39 件。行田市は、和装文化の足元を支え続ける足袋の産地として、足袋蔵など歴史的建築物が残る趣きあるまちの景観が評価されました。

平成時代の足袋蔵エピソード①“足袋蔵”という名称

足袋の倉庫のことを行田の一部の足袋商店では昔から「足袋蔵」と言っていたようですが、公式に使われたのは、平成元年の NHK 番組が最初です。その後平成 16 年「NPO 法人足袋蔵ネットワーク」が発足し、その活動を通じて「足袋蔵」という名称が定着してきました。

平成時代の足袋蔵エピソード②足袋蔵の再生化

「蔵めぐりスタンプラリー（蔵めぐりまちあるき）」などのイベントを開催するとともに、『忠次郎蔵』、『足袋とくらしの博物館』、『牧禎舎』を相次いで



オープンさせました。さらに『忠次郎蔵』、『武蔵野銀行行田支店』、『高澤家』、『十万石行田本店』、『彩々亭』、『大澤蔵』の国登録有形文化財への登録を推進するなどの活動を行いました。



そうした動きと呼応するように『足袋蔵ギャラリー門』、『Café 閑居』、『玉翠堂』、『はす蔵』などか次々に開業して、足袋蔵再生の機運が盛り上がりました。



平成時代の足袋蔵エピソード③継承され発展する足袋蔵のまち

寸暇を惜しんで働く女工さんの間で、手軽に食べられるおやつとしてお好み焼きに似た「フライ」、おからのコロッケとも言える「ゼリーフライ」が流行し、地域の食文化として定着しました。また、販売先への手土産として奈良漬が好まれ、行田の名物となりました。



平成時代の足袋蔵エピソード④こんな、かわいい蔵も、平成の蔵めぐりあるきで発見しました。2012 年から参加いただいている「秋山蔵」商標:かねまつ足袋。小さくてかわいらしい蔵です。



平成時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/013.pdf>

足袋蔵 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/108.pdf>

足袋蔵・再生 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/109.pdf>

7.これからの足袋産業・足袋蔵

足袋産業で繁栄していたことを象徴する多種多様な足袋蔵も約80棟が現存し、時折流れるミシンの音と共に、裏通りに趣きのある足袋蔵のまち並みを形成しています。そしてその再活用が、まちに新たな彩りを加え始めています。行田では足袋の生産が続けられており、日本一の産地として新製品を国内外へと発信し続け、「足袋と言えば行田」と多くの方に親しまれています。

●近年若い人の中で「和装ブーム」が起こるなど足袋を見直す動きも起こり始めています。行田の足袋産業は生産拠点を海外に移す企業も多くなりましたが、現在でも約30の足袋関連企業が存在し、年間141万足、全国シェアの約35%を生産する日本一の足袋産地であることには変わりはありません。

●足袋を売る。出来上がった足袋は、以前は袋に入れていたが、現在はビニール袋となっている。そして、行田の特徴ともいえる商標ペーパーを添付した。行田の足袋製造業者は、それぞれ自社のブランドを持ち、それを商標として登録していた。工夫をこらしたデザインによる商標を印刷し、販売に際しては製品とともに袋に入れたり、縫いつけたりして、自社の看板にしていた。1者が複数の商標を持つ場合があり、その数は行田全体で200を超えるといわれる。

そして、平成29年4月28日、行田市が日本遺産認定の申請をしていた「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」のストーリーが県内初の“日本遺産”に認定されました。

●日本遺産認定後、行田市は日本遺産認定を地域活性化につなげるため、「日本遺産地域活性化ビジョン」を策定しました。として5月30日には、推進母体として、市、商工会議所、自治会連合会、構成資産の所有者等からなる「日本遺産推進行議会」を発足させて、市を挙げて“日本遺産魅力発信推進事業”に取り組んでいます。推進事業内容は、①情報発信(PR動画やウェブサイト、パンフレットなどの各種ツールを作成。ガイダンスセンターや記念ブースの設置など)、②普及啓発(日本遺産セミナー、日本遺産講座の開催。モニターツアー、体験ツアーの開催など)、③人材育成(行田みらい塾の開講、観光ガイド・足袋蔵コーディネーターの育成、足袋製造技術者の養成など)、④公開活用のための整備(観光案内板の設置など)、⑤調査研究(足袋蔵等の調査・再活用に向けたマーケティングなど)です。

具体的には、1.「旧忍町信用組合店舗の移築・改修」日本遺産の一つである同店舗をまちなかのにぎわい創出拠点として改修・復元・再活用する事業を進めている。



全と活用
事業を行

2.「ふるさとづくり事業」足袋蔵などの貴重な歴史的建築物の保をはかるため、それらの建築物を改修し、公共性のある活用を行う。「牧亭舎」、「牧野本店」の再活用、「栗原家モルタル蔵」の外壁の改修などが候補になっている。

3.「行田らしいまち並みづくりとにぎわい創出事業」行田市駅周辺の歴史的街路やまち並み景観の整備を推進する。

4.「足袋のまち行田」市、商工会議所、市内の足袋メーカーが集まり、足袋を通じた地域活性化の推進母体として、「足袋のまち行田」活性化協議会が立ち上げました。足袋の販路拡大、新商品の開発、「足袋のまち行田」のPR 動画の作成などのPR 活動、足袋コレの開催などの事業を推進します。

5.「国登録有形民俗文化財の資料整備事業」郷土博物館所蔵の国登録有形民俗文化財行田の足袋製造用具及び製品について、資料の整備と詳細な調査研究を進めてまいります。行田足袋の歴史が明らかになることが期待されます。

6.「NPO 等による日本遺産構成資産の保存・活用」足袋蔵等歴史的建築物の保存・活用を進めており、それら構成資産を舞台に、「蔵めぐりまちあるき」「そば打ち教室」「足袋蔵昔体験セミナー」「忍町アートギャラリー」などのイベントも定期的で開催されています。こうした活動がより広がることが期待されています。

今、行田は日本遺産の構成資産の足袋蔵などの地域に点在する歴史・文化資産を生かした良好なまち並み景観が整備され、そこに人々が集うようになって、にぎわいの創出が図られつつあります。

案内板 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/001.pdf>

日本遺産 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/003.pdf>

文化財 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/005.pdf>

イベント <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/006.pdf>

足袋蔵サイン <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/007.pdf>

足袋蔵・再生 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/109.pdf>

日本遺産 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/110.pdf>

⑦現在の足袋蔵

=====

日本遺産は文化財を活用して観光推進等で地域活性化を図ろうとする制度です。「地域活性化」や「観光振興」には地域の総合力が重要です。日本遺産について知ることを通じて、市民ひとりひとりが地域の魅力を再認識し、その魅力をさらに光り輝かせて行くことができれば、それを観に多くの人々が訪れるようになり、地域に新たな賑わいと活力が生まれてきます。2017 年、行田の足袋商店を舞台にした池井戸潤氏の大ヒット小説『陸王』がテレビドラマ化され、10 月 15 日より放映が始まりました。放映開始と共にロケ地である行田市に多くの方々が訪れ始めています。『陸王』を入口に、来訪者の方々に日本遺産に認定された“行田足袋”や“足袋蔵”などの行田市の魅力を知っていただき、行田のファンになっていただきたいと思います。



参考資料

日本遺産(Japan Heritage)に認定された行田市のストーリー 行田市教育委員会 2017

https://www.city.gyoda.lg.jp/41/03/10/japan_heritage/20170419.html

日本遺産セミナー「日本遺産とこれからのまちづくり」説明資料

第 26 回テーマ展「行田の足袋」 行田市郷土博物館平成 28 年発行

蔵めぐりガイドブック GYDA TABIGURA NETWORK NPO 法人ぎよだ足袋蔵ネットワーク

足袋蔵関連サイト



GYOUDA TABINET の URL

江戸ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/201.pdf>

明治ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/202.pdf>

大正ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/203.pdf>

戦前ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/204.pdf>

戦後ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/205.pdf>

平成ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/206.pdf>

これからのストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/207.pdf>

日本遺産 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/208.pdf>

日本遺産足袋蔵写真 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/209.pdf>

足袋蔵ストーリー <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/200.pdf>

案内板 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/001.pdf>
日本遺産 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/003.pdf>
文化財 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/005.pdf>
イベント <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/006.pdf>
足袋蔵サイン <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/007.pdf>

江戸時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/008.pdf>
明治時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/009.pdf>
大正時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/010.pdf>
戦前昭和 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/011.pdf>
戦後昭和 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/012.pdf>
平成時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/013.pdf>

江戸棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/102.pdf>
明治棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/103.pdf>
工場棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/104.pdf>
大正棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/105.pdf>
昭和棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/106.pdf>
戦後棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/107.pdf>
足袋蔵 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/108.pdf>
足袋蔵・再生 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/109.pdf>
日本遺産 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/110.pdf>

NEWS <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/news.html>
2016 足袋蔵 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/index2017.html>
2017 足袋蔵 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/index2016.html>
LINK <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/link.html>
HOME <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/index.html>